

## 李義山詩集再考

——明清諸本覺え書——

荒井健

さきに「李義山詩集小考」（本誌五二冊・一九八〇）において、李義山のばあいは杜牧などと同様に<sup>(1)</sup>、詩集の宋板は恐らく今に傳わらぬのではあるまいか、とのべた。以後十年を経過したが、義山詩宋板發現の報には依然として接することなく、<sup>(2)</sup>もはや快報を期待するのは絶望的らしい。かくなる上は、「小考」に記したとおり、二種の宋本の面影をほぼ忠實に傳えるものと思われる、錢謙益寫校本『李商隱詩集』三卷（遼寧省圖書館に藏されると聞く）が、なるべく早い機會に套印出版されるのを待望するばかりである。宣統元年神州國光社景印本では、「朱墨の筆を以て、一再校勘す」と稱される原本の實像には隔靴搔癢のうらみがある。さらに欲をいえばやはり「小考」でふれた北京圖書館藏の影宋抄本三冊も影印されぬものか。

今回は明清の義山詩の主要テキストについて、簡単なメモを記しておきたい。義山詩のばあい、オリジナルテキストに準ずるものとしての唐寫本はむろんのこと、その「複製」としての宋板本がもはや目暗しがたい、その事情を反映して、義山詩集「複製」の「複製」、つまり宋元の板本をもとに刻した明板の種類も數多くはない。いつぞや上海圖書館を訪れたおり、同館御自慢の藏書、宋板杜詩を拜ませていたゞいたあと、義山詩集の古刊本をひとつと依頼して、いかなる

本が現れるならんと期待していたところ、示された二種は、行數字數などみな同じく、ただ板式を眺めた感じが微妙に異なるのみで、いずれも四部叢刊本と同一もしくは同系の二本であった。叢刊本義山集はいうまでもなく別集ではなく總集に收められるものにすぎないので、純然たる單刻の義山詩集といえば、明代の板本においてもまた極めて稀覯に屬するようである。

書誌類によって知りうるのところでは、單刻の義山集明板は二種がある。まず第一は、傅增湘舊藏本、『藏園羣書經眼録』卷一二。

## 李商隱詩集六卷唐李商隱撰

明刊本、九行十九字、版心に義山の二字を題し、其の字體を審らかにするに、當に明の嘉靖の時の刊本たるべし。前に李商隱の小傳數行、次で目錄あり。本書は五言古、七言古、五言律、五言排律、七言律、五言絶句、七言絶句に分ちて各おの卷を爲し、號數は各卷を通じて之を計し、七言律以下は別に號數を爲す。

按ずるに義山の詩は清朝に盛行し、刻本最も多し、然れども一の明刻本を求むれば、汲古閣より外に殆ど得べからず。前月蘇州の葉邨園同年の許に在りて嘉靖刻の二卷を見るに、乃ち毘陵の蔣孝の唐人十二家集本なり、單刻に非ずと雖も、已に罕見と爲す。頃ろ杭州に來り、述古齋李寶泉の處に至りて此の書を得、之が爲に狂喜す。渠輩之を視るに甚しくは意を措かず、普通流行の王孟高岑、飛卿長吉等と相擬するに過ぎず、故に値を索むるも亦昂きに過ぎず。余よりして之を觀れば、則ち之を通行の宋元本に較べて更に得難しと爲す、然らば則ち宋元と同珍と謂うと雖も可なるのみ。

陳韞山の言うを聞くに、昔年曾て此の刻本を得、三十金を以て何秋葦中丞に售る。書は項子京の舊藏たり、子京に手識一條有り、此の書を値四兩に得と云う。明季清初の人書を收むるに兩を以て計するは惟だ宋本を然りと爲すのみ、

汲古の目を観て知るべく、然らば則ち三百年前に此を視て已に珍祕と爲す、今日余の自らを高しとして矜詡するは寧ぞ過ちと爲さんや。

此の本は五言已に排律を標したれば、決して宋本より出る所に非ざるなり。己未（一九一九）七月十二日記す。沆叔<sup>③</sup>この記述によれば、同じ嘉靖の叢刊本とは書名こそちがえ、卷數（六卷）體裁（詩體排列次序）が一致し、何等かの關係がありそうだ。しかしこの本は未見、その邊の事情を確めるすべがない。傅氏の藏書は多く北京圖書館の有に歸しているが、この本は同館古籍善本書目に見えぬのである。なお、萬曆三十年（一六〇二）の序を持つ徐燭『徐氏紅雨樓書目』卷四に、「李商隱詩六卷」と著録されるのがあるいはこの板本なのかもしれない。

明板單刻本の第二は、清朝内府藏本、『天祿琳琅書目』卷一〇・明版集部。

李義山集一函  
四册

唐李商隱著三卷

陳振孫の書錄解題に李義山集八卷、樊南甲乙集四十卷を載す。惟だ玉溪生集は三卷と爲す、然れども即ち前卷中の賦及び雜著と云い、且つ馬端臨の文獻通考も亦祇だ稱して二卷と爲す。此の本は李義山集と標し、専ら其の詩を録す。

振孫の載する所の玉溪生集と、卷帙は同じと雖も、其の書各おの異れば、則ち宋人の刊する所に非ざるは疑い無し。

特だ撫刻清朗、亦明槧の善本なり。<sup>④</sup>

陳錄には件の玉溪生集のほか、正しく「李義山集と標」する三卷本詩集をも並載しており（「小考」参照）、于敏中らの「考證」は杜撰きわまる。「此の本」が「明槧の善本」に非ず、實は「宋人の刊する所」であつた可能性さえある。宋板としてもおかしくないと見えたからこそ、わざわざ宋板じゃないと斷つた、と思ふのはひがめか。それはともかく、これまた以後の書目題跋に一向見當らず、その足どりは擱めない。『玉谿生詩詳註』の撰者馮浩もいう、「此の本 觀るを得る

に由無きを恨みと爲す<sup>(5)</sup>（補卷首）ただ、幸いなことに四庫全書本すなわち庫本（乾隆四七年「一七八二」成書）がこれを底本とするので、正文についてはその内容を概ね察知できる（庫本の常例として原本の目録序跋の有無等は不詳）。『四庫全書總目提要』卷一五一、義山詩の項「李義山詩集三卷」の題下に「内府」と雙行注がある。

ところで、この内府藏本と冊数を同じくする義山の詩集が、正統六年（一四三六）に成った『文淵閣書目』庫本卷二（臺灣商務印書館影印本）に録される——「文集」類に「李義山文集一部十冊」、「詩詞」類に「李商隱詩一部四冊」<sup>(6)</sup>。馮浩はやはり『詳註』巻首にこの二條を引き、「十冊四冊、豈今本に較べて多しと爲さんか。惜しむらくは搜校する能わざるのみ<sup>(7)</sup>」と遺憾の意を表わす。明清兩内府本はもとより標題を異にするが、歷朝祕藏の書物となれば、そうそう安易に原裝は變改されまいし、別の二本の冊数が偶然一致したまで、と簡単に割切れぬように思えてならぬ。そもそも、琳琅目はさておき、文淵閣目の「李商隱詩」が果してその原題を忠實に録するか疑問の餘地がある。閣目詩詞類には、たとえば「陶淵明詩」、たとえば「韋蘇州詩」等々、同一書名が五部六部と列記されているからである。閣目と標題冊数同一の集本は葉盛（一四二〇—七四）の藏書目録と稱する『葦竹堂書目』卷四「詩詞集」類にも見える、「李商隱詩四冊」。ただし葉氏書目の今本は來歴がいささか怪しく、果して葉盛その人の手に成るか否かもさだかでない（粵雅堂叢書本の伍崇曜の跋に、十駕齋養新録などを引いてその問題を論じたあと、ともかく入手した「舊鈔本」が珍しいので刊刻したという）。殊に葉氏書目詩詞類を閣目詩詞類と對照すれば、前者は後者を適當に引き寫しにしただけなのが一目瞭然だ。明内府本が葉氏の手に移ったとは俄かに信じがたい。

さて庫本（内府藏本）の位置づけについて、『四庫全書簡明目録』卷一五「李義山集三卷」の項には、  
其の集は唐宋以來、祇だ此の本有るのみ。近刻或は分體、或は編年、皆其の舊に非ざるなり<sup>(8)</sup>。

と稱する。「編年」は馮浩注本（乾隆二十八年「一七六三」初刻）をさす。「此の本有るのみ」は、やや誇張の嫌いがある

が、宋代以来のテキストといえはこの手の本しか現存しない、とよみ變えれば通じ、少くとも庫本が宋本ないし舊本のかたちを忠實に伝えるのは確かだ。「小考」でのべたとおり、錢謙益寫校本すなわち錢本は二種の宋板を用いたが、底本とした宋板甲よりも校定に用いた宋板乙がすぐれ、そして唐詩百名家全集すなわち席本は宋板乙に據って刻されている。結論からいうならば、庫本（内府藏本）は席本に極めて近く、やはり宋板乙の流れを汲む本と考えられる。

理由、その一。庫本は中巻および下巻の巻頭の詩篇がそれぞれ「南朝243」「正月十五夜聞京有燈恨不得觀475」（作品番號は席本を基準とし、引用詩題・正文とも原則として席本による。本誌五〇冊「李義山詩各本篇目對照表」參照）であり、席本ひいては宋板乙と一致すること。錢本によれば、宋板甲の中・下巻頭詩篇は「獨居有懷250」および「過故崔兗海宅與崔明秀才話舊因寄舊僚杜趙李三掾490」で、乙本をはじめ現存三卷本すべてと合致せず、甲本の各巻ごとの作品數には他とかなりの差異がある。その二。庫本は下巻末近く「夜思568」の詩題の前行に、席本とおなじく「續新添二十六首」の七字がある。錢本は前詩「井泥567」の正文末行と本詩詩題との行間に「新添集外詩」の五字を補入、さらに「續新添二十六首」と訂正、宋板乙にもとづく校改のあとを窺わせる。この一行、現存の三卷本で他に「續新添二十六首」に作るものはない。その三。庫本の収録詩數は、續新添二十六首をふくめ計五九三首、巻尾は「安平公詩593」の一篇で終る。これも席本におなじ。兩者以外の三卷本その他諸本はいずれも拾遺詩篇を増補し全詩數は六百首前後に達する。錢本は下巻四六後半葉以下が脱落し、安平公詩の初二行を存するのみで、正文末葉の子細を確認できぬが、その目録によるならば巻末の一篇はやはり安平公詩である（ただし、目録の末尾に赤壁・杏花・垂柳・清夜怨・定子と五つの詩題を補寫し、さらにそれらが塗抹されている）。その四。字句の異同について庫本は席本と共通するところが多い。見本的に二三の例をあげる。(1)「楚宮二首之一264」1句「頭」の字、席本をのぞく中國刊本すべて「前」、庫本は席本におなじ。(2)「復至裴明府所居386」7句「醪」の字、錢本は「膠」に作り「醪」と旁注、席本・庫本ともに「醪」に作り宋板乙におなじ。(3)「宋玉394」

2句「唯」の字、錢本は「誰」を「唯」と改めるが、席本・庫本ともに「唯」に作り宋板乙におなじ。で、内容的には庫本席本同祖同系を肯定してよいかに見えるが、ただ庫本の標題「李義山詩集」は、むしろ宋板甲の「李義山詩」に極めて近く、大きな疑問を残す。

さて、編次その他の點で庫本および席本とは少しく異なる三卷本二種が明末清初に刊行されている。二種ともにすでに單刻明本とはいえないが。一は崇禎十二年（一六三九）汲古閣刊唐人八家詩本『李義山集三卷』すなわち毛本。一は順治十七年（一六六〇）序刊朱鶴齡箋註『李義山詩集三卷』すなわち朱本。總じて席本そして庫本との距りは、毛本がより近く、朱本はより遠い。

第一に、兩者とも「夜思<sup>568</sup>」の詩題の前行は續新添二十六首ならぬ「新添集外詩」の五字に作り、集外詩の末尾に新たに「赤壁<sup>594</sup>」「垂柳<sup>595</sup>」「清夜怨<sup>596</sup>」「定子<sup>597</sup>」の四首が補われる。毛本には特に按語はないが、朱本は赤壁の題下注に「此の詩は杜牧集に見ゆ。○以下四首、一本闕」といい、また定子の題下注に「此の詩は亦杜牧外集に見え、題して隋苑に作り、注に、一に云く、定子は牛相の小青なり」とい<sup>10</sup>う。第二に、席本・庫本は、もとづくところの底本の未整理のさまを忠實に反映し、明かに同一作品の異文と解さるべき七絶二篇、

席上作<sup>11</sup>  
一云子爲桂州從事故鄭  
 公出家妓令賦高唐詩 135

澹雲輕雨拂高唐。玉殿秋來夜正長。料得也應憐宋玉。一生唯事楚襄王。

席上贈人<sup>12</sup>  
故桂林榮陽公  
 席上出家妓 510

淡溼微雨恣高唐。一曲清聲遶畫梁。料得也應憐宋玉。只應無奈楚襄王。

を上卷下卷に別掲するが、毛本・朱本は135の校注として510の詩題・正文を引く。なお錢本は135のみを載せ、510は下卷該當

個所の書眉に詩題・正文が、補寫されるので、宋板甲は毛本・朱本同様50未收のはずである。第三に、席本・庫本は續新添詩中「城上575」のあとに「江上憶嚴五廣休576」の七絶を編入するが、毛本・朱本および錢本は下卷「天平公座中呈令狐令公509」のあとにこの七絶を排列し、朱本は「一本入集外詩」と校記がある。錢本もこの七絶の校注に「在後」と記し、續新添詩の該當個所書眉にその詩題および正文冒頭の四字「征南幕下」を補寫するので、毛・朱本と席・庫本はそれぞれ宋板甲と乙の編次に合致することになる。が、以上の第二第三の點からして毛・朱本が宋板甲の直系かといえは、そう簡單にはいかず、例の宋板甲の中・下卷卷頭篇目との不整合は決定的だ。

毛本は作品編排が宋板乙系各本と少し異なるが、正文の内容自體はさほど異質性を示さず、宋板甲・乙を合せて考えればやはり宋板系とみなしうるのに對し、朱本はいずれの面においても獨特の個性を持つ。一、錢本（＝宋板甲・乙）・席本・庫本および毛本では、卷上の篇目番號31は五排「商於」、33は七絶「渾河中」だが、朱本は「商於」が12、「渾河中」が31に排列される。二、錢本以下四本では、卷下の五排「贈送前劉五經映三十四韻546」七古「河内詩二首547 548」の順序だが、朱本は逆轉し「河内詩」が先置される。三、朱本のみに見られる異文を數例あげる。(1)「籌筆驛101」1句、朱本「魚」他本みな「猿」。(2)「無題四首之二115」1句、朱本「風」他本みな「南」。(3)「高松412」3句、朱本「候」他本みな「後」。(4)「漫成五章之四450」2句、朱本「中」他本みな「東」。(馮注にいう、「舊本皆東に作る。朱氏中に作るは、誤なり」)<sup>(13)</sup>(5)「行次西郊作一百韻566」109句、朱本「左」他本みな「右」。異文のうちには朱氏の私見に出るものがあるかもしれないが、作品の排列まで恣意的に、しかもごくわずかばかり手を加えるとは考えにくい。朱本の獨自性からするならば、宋板乙はいうに及ばず、宋板甲ともまた別なる一種の三卷本をその祖本として想定してみたくなるけれども、もとより何らの物證があるわけではない。

ところで、上述の朱本のかたちを、體裁から校記のはしばしに至るまで受け繼ぐのが康熙四十六年（一七〇七）御定『全

唐詩』李商隱卷で、ごくまれに朱本に従わず、また他本を參看して「一作某」の校注を加えたりするものの、ほとんど朱本の正文を重刻したに等しい。『全唐詩』が三首の拾遺詩篇および佚句若干を付載するのが最大の差異だ。『全唐詩』は胡震亨と季振宜の勞作を種本に頂戴し、一年五カ月で即製されたとするのが定説で、しかし義山詩のばあいは例外的に朱鶴齡本が採用されているのだ。のみならず、朱本は以後續出する義山詩注釋のさきがけとなり、馮浩本をのぞく諸注すべて朱本を典範としたので、清朝一代を通じてその影響力は強大であった。たとえば義山の名作のひとつ五絶「向晚意不適25」は「樂遊原」の名で知られるが、錢本・席本・庫本等は單に「樂遊」に作り、現に通行の詩題は朱本（および全唐詩等）にもとづく。ちなみに馮浩本は「樂遊原」に作り、「一上有登字。一下無原字」と注記する。

朱鶴齡本は、同じ三卷本にしても宋板系のそれとは實質的に少しく異っていた。ところが四部叢刊本『唐李義山詩集』すなわち蔣本は分體の六卷本ながら、大まかにいえば馮浩の、いわゆる「舊本」に屬するので、つまり作品の中味は舊三卷本に依據しつつ篇目を並べ變えたものである。明朝半ばすぎの唐詩總集『中唐十二家詩集』の中に收められる。葉德輝『郇園讀書志』卷七「李義山詩集六卷」の項にいう。

唐の李商隱詩集は、唐書藝文志に玉谿生詩三卷と云い、（中略）直齋書錄解題に李義山集三卷と云う。蓋し宋より以來傳うる所皆此の如し。故に毛晉の汲古閣刊八唐人集、席啓寓刊百家唐詩皆之に因りて異同無きなり。此の明の嘉靖庚戌（二十九年〔一五五〇〕）毘陵の蔣氏刻中唐人集十二家の一、其の本は分體、五言古に始まり、七言絶に終り、六卷と爲し、半葉十行、行廿字。句中にま小注の一に某に作るを附す、皆世に行わるる本に無き所、錢牧翁手校宋鈔本を以て之を證するに、往往之と相合し、必ず本づく所有るを知る。（中略）其の注本に三卷本の舊に仍る者有り、改めて編年と爲す者有り、惟だ白文分類本は則ち未だ之有らず。之有るは、僅に此の本のみ。義山の詩は癩祭を以て



工と爲し、世に李善の選に注するの才無く、終に之を穿鑿に失するを免れず。余恆に一の白文善本を得、塵障を一洗するを思ふも、毛席二刻の外を除く外、一の稍舊きの本にて、便を流覽に取るを獲ず。今此の本を得て、願の相償わる如しと謂う可し。書前に長洲の龔氏羣玉山房藏書記の朱文中方印有り、又野夫所藏の朱文小方印有り、蓋し二百餘年、未だ蘇境を出でず。自來蘇人は汪閔源の藝芸書舎、黃蕘翁の百宋一廬の如く、舊刻の書を收藏する極めて多し、獨り未だ毘陵蔣刻唐詩の一種に涉及せざれば、則ち其の本の希見なる知る可し。己未（一九一九）初夏芒種<sup>④</sup>。

この本は六年後に傅增湘の手に渡った。『藏園羣書經眼録』卷一七に「中唐十二家集七十七卷明蔣孝輯」と著録される總集の跋文が『藏園羣書題記續集』卷五に見える。

明の嘉靖庚戌、毘陵の蔣氏惟忠孝家藏の唐人詩集儲光羲以下十二家を以て梓に授け、既に自ら之が引を爲り、又方山薛應旂に屬して之に序せしむ。十二家とは、儲光羲集五卷、劉隨州集十卷外集一卷、毘陵集三卷、錢起集十卷、盧戶部集十卷、孫集賢集一卷、崔補闕集一卷、劉賓客集六卷、張司業集六卷、賈浪仙集十卷、王建集八卷、李義山集六卷、通じて七十七卷。序の後に臥龍橋東三徑主人の牌子、又毘陵の陳奎刻の一行有らば、其の書は即ち常州に刻せる者と知るなり。半葉十行、行二十字、白口、左右雙闌。諸家の編次は皆分體。前に目錄有り、儲光羲集は顧況の序を録し、張司業集は張洎の序を録し、又正徳乙亥の河中の劉成徳の序を録するも、其の它是咸序跋無し。蔣氏の自序を按ずるに、家藏の鈔本を以て梓に付すと言う。然れども諸家の集を以て之を攷るるに、其の儲錢王賈盧劉長卿、卷數は舊本と相符し、崔孫の二集は舊本の證とす可き無く、第だ寥寥たる數葉なれば、其の原編は當に一巻たるべきこと知る可し。惟だ毘陵集は本と二十卷と爲し、今祇だ其の詩三卷を録す、證するに席刻を以てすれば正に同じく、或は亦舊編より出でん。劉賓客集の六卷に作り、張籍集の五（？）卷に作り、李義山集の六卷に作る若きは、則ち徧く古今の書目を檢するも、毫も據依する所無し。疑うらくは蔣氏意を以て之が編次を爲し、殊に矜慎の道を失えり。然れども

明人は傳刻に勇にして、標題編次、往往輕がるしく古式を變じ、殆ど已に習いて風氣と爲り、其の非を知らず、蔣氏に於て又何をか責めん。

余は十五年前に於て、南中に薄遊し、此の集を收得せしも、祇だ八家を存す。市估は序文を刊改し、別に總目を寫し、以て全帙に充つるに至る。然れども余は固り心に其の非を知れり。今各冊に太原氏珍藏の印有る者皆是なり。嗣ぎて廠肆に遊び、錢盧劉賓客の三家を獲、以て其の闕遺を補う可し。而して義山の一集は、則ち訪求すること積年なれど、終に獲可からず、功は一簣に虧き、深く用て悵惘す。歲乙丑（一九二五）に在るに泊び、吳閩に客と作りて、葉奐彬同年に晤い、談じて其の家に適ま此の集有るに及び、慨きて允すに他書と相易うるを以てせば、因りて載取して以て歸る。其の卷首に長沙龔氏羣玉山房藏書記、野夫所藏の二印有り。卷末に奐彬の手跋四百餘言有りて謂えらく白文分類本、此を創見と爲し、且吳中の藏家藝芸士禮の如き、多く舊槧を儲え、而も毘陵の蔣刻、獨り一種も無く、其の罕觀なる知る可しと。其の言の矜詡甚だ至れり、然れども終に能く割愛相界、鍊石補天の功を奏し、掘井及泉の力を竟えしめ、良だ感ずるに足るなり。茲に其の原委を詳述し、以て良友の高誼を志せり。（中略）此の書は嘉靖の刻梓より、今日に迄び、已に三百八十餘年を越え、傳本の稀なる、固より已に鳳毛麟角の如し。況や復余の手中より、闕くるよりして完きを獲、既に失いて復得、十數星霜を涉歴し、始めて宣綾もて角を包み、繭紙もて衣と爲すを得、煥然として觀を改め、以て諸を几案に陳ぶ。則ち後人摩挲賞玩の餘、宜しく如何に什襲珍儲し、世守失う勿くして、余の艱勤搜討の意に負く毋かるべきか。甲戌（一九三四）重九の日、沅叔藏園の食字齋の中に書す。

四部叢刊本義山詩集は、一卷・五卷標題の下方に「野夫所藏」の印影あり、葉氏傳氏遞藏蔣刻中唐十二家集の一たること  
が確認される。蔣本を一覽すれば、二（七古）五（七律）六（五絶七絶）の三卷は、それぞれの詩體を舊三卷本の編次の  
ままに抜き出して並べて行ったとすぐ見當がつく。試みに卷六の七絶最初五篇を示すと、「霜月8」「人欲13」「華山題王

母祠14」「華清宮16」「北齊二首2627」。特にこの七絶の巻において、(1)「席上作135」「席上贈人510」兩詩篇を並載し、(2)「江上憶嚴五廣休576」を「席上贈人」よりあとに排列する、この二點は席本および庫本と相通じ、蔣孝が據ったのは宋板乙系にはかならぬことを窺わせる。ただし、一(五古)三(五律)四(五排)、三巻の作品排列原則は不詳。さらに蔣本が字句の面でも錢本など宋板系を受けるといふ葉氏の見解もまず肯定できるが、見本的にいま三例をあげる。(1)上述の五絶「樂遊原」の詩題を錢本等と同じく樂遊に作る。(2)同題の五律「樂遊春夢亂不記419」のばあいも毛本・朱本・全唐詩が樂遊原に作るのとは異り、錢本・席本・庫本等と同じく原の字なし。(3)五排「有感二首之二270」の重要な異同、6句の毛本・朱本・全唐詩等が「兵徒」とする個所、錢本・席本・庫本等は「兇徒」に作り、蔣本も同じく兇徒——のはずだがあやまつて「見徒」になり、これでは意味が通じない。蔣本は現行の義山詩集では確かに最も古い刊本に違いないが、實は作りの雑なのがむしろ特徴で、その意味では葉氏の持ちあげるほどの「善本」とはいいがたい。この個所のほかにも、誤字——五律をあつめた卷三冒頭の詩體標示に「五言古詩」とある。脱字——七律「對雪二首之二155」8句「腸班雕送陸郎」腸斷の斷の字を脱する。詩篇の失收——五律「楚宮複壁交青瑣54」。詩篇の重出——七絶「漢宮詞113」卷六のほか七律をあつめた卷五にも見える。などなど、いずれも校訂の粗漏を如實に表わす。ちなみに蔣刻唐詩はかつて葉氏傳氏ら大藏書家の垂涎の的であったが、現在は却って各地の機關に藏されている<sup>16)</sup>。

蔣本との關連において問題になるのは、康熙十二年(一六七三)自序・季振宜輯『唐詩七百十六卷』(一九七九・藝文印書館影印底稿本)<sup>17)</sup>すなわち稿本、ならびに張之象輯『唐詩類苑二百卷』(萬曆二十九年「一六〇一」刊本)、唐詩總集二種である。稿本は「季滄葦選百納本全唐詩」(首函標題)<sup>18)</sup>と稱されるごとく、唐人の明板各種別集・總集をばらして切りつぎした底本に詳細な校補の筆を加えて成る。李商隱卷はとりわけ構成が複雑で、蔣本と同種のテキストを底本とするが、絶句の部分のみ嘉靖刊本『萬首唐人絶句』を用いる(例外は五絶「柳枝五首537—541」で、これは萬首絶句本が省いた長文

の序を残しておくためであろう)。蔣本と同種というのは、叢刊本と同じ板式、同じ字體、板木のいたみぐあいから推しても同一テキストとしか見えぬのに、(1)叢刊本は魚尾が白に對して稿本は黒、(2)ごくまれに文字に異同があり(五絶「贈柳50」6句、稿本缺泐の字を叢刊本は「更」)、(3)七律をあつめた五卷末に叢刊本は「拾遺」として「促漏195」を刻するが、稿本は拾遺一篇を缺く。(なお叢刊本失收の前記五律「楚宮」を稿本は墨筆補寫している)これらはたとえは初刻本と重刻本との差と簡單に決めてよいのかどうか、兩者の繼承關係はさしあたり未詳。また『唐詩類苑』は義山詩を網羅的に收めるが、字句の異同からみて明かに蔣本系に屬し、從つて當然叢刊本とおなじく「楚宮」は失收、しかも稿本とおなじく「促漏」をも收めぬので、類苑の底本もまた黒魚尾本と斷じてよからう。いずれにせよ、蔣本ないし蔣本系の本は、明代では毛本出現以前のほとんど唯一の刊本といつてよく、さればこそ類苑や稿本の編者もまずこれに頼つたのであらう。

敍上の諸本のほか、高麗刊本『李商隱詩集十卷補遺一卷』すなわち麗本があり、『藏園羣書經眼録』卷一二にも、

李商隱詩集十卷唐李商隱撰

朝鮮古刻本、九行十七字。有補遺五葉。(辛未「一九三一」歲暮)。

と著録され、國內では大阪大學および天理大學圖書館などに藏される。天理本は今西龍博士舊藏にかかり、一・四・八卷の巻首に「柳村」「清洲韓氏」「亨吉閒而」の朱印あり、同博士の付箋に「韓亨吉字泰而號柳村松齋惠六世孫光海朝文科官至參判」という。もと韓亨吉(一五八二—一六四四)の藏書であつて、麗本刊行時期の下限が確認できるが、十六世紀の刊本とは見がたく、十七世紀前半の書物であらう。<sup>19)</sup> いわゆる麗本の價值については中國でも早くから注目されており、すでに十一世紀末北宋のころの記録(『宋會要輯稿』七〇冊一〇九四三卷後一二葉)にいう。

(元祐七年)十二月十九日、祕書省言えらく高麗國近日進獻せる書冊、訪問するに多く是異本にして、館閣に無き所

なり。乞うらくは暫く賜頒され、本省に降付し、限を立てて贍本するを。乞うらくは即時に元本を進納し、別装し秘閣の黄本書に寫して收藏するを。詔すらく祕書省に降付し、仍お本省をして二本を贍寫校正し、中書省尙書省に送り、及び別に二本を贍寫校正し、太清樓天章閣に送りて收藏せしめよ。<sup>20</sup>

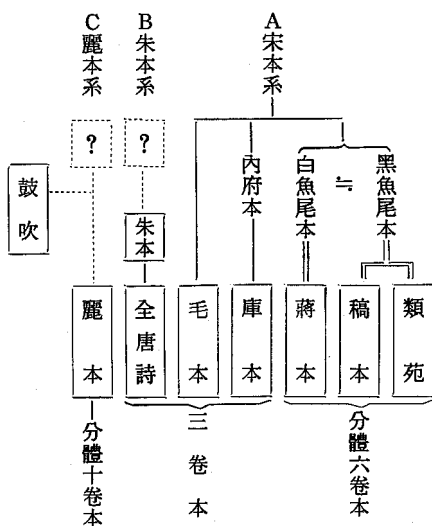
降って明代においても胡應麟『甲乙剩言』に、

劉玄子朝鮮より還り、言えらく彼中の書籍、中國に無き所の者多し、且刻本精良、一字として趙文敏に倣わざる無し。惜しむらく倭奴の殘毀するところと爲り、圍溷の間、往往書幅を以て穢を拭う、亦典籍の一大厄會なり。因って目に見るに忍びず、毎に部卒に命じ、聚めて之を焚かしむと。余乃ち知る國初朝鮮は顔子を獻ずるに、朝議は僞書たるを以て之を却く、此四庫の前代に及ばざる所以なり。<sup>21</sup>

とあり、胡應麟のような有識者たちの間では、麗本の貴重さが十分認識されていたのである。

中晩唐詩の別集でいうならば、内閣文庫藏の活字本『李長吉集』が本國に比類のない稀本だが、義山の詩においても似通った現象が見られる。義山集の麗本も蔣本同様五古に始まり七絶に終る分體で、その卷立ては、一（五古）二（七古）三・四（五律）五・六（五排）七・八（七律）九（五絶・七絶）一〇（七絶）補遺（七絶）となるが、分體以外に蔣本との共通性はない。麗本の毛色の變りぐあいは、まず収録作品の面に顯著で、他本と重ならぬ詩が五篇あり、なかでも七律「感興寄友607」は集本はおろか全唐詩を通検してもこの詩が見出せず、<sup>22</sup>ようやく元代の詩話『木天禁語』に引かれるのが判明したがここでも肝心の作者名は記されていない。また七律「九日503」の詩題を「九日令狐綯不見」に作るのは他の集本には皆無、ただ『詩林廣記』前集卷六に引かれるものだけが麗本とおなじ。その他さまざまな異文は枚舉にいとまがない。しかし、李朝の人々に果して明人と同じく、「輕がるしく古式を變じ」る「風氣」があつたか。かれらが本國の集本から離れて全く新編の義山集を創出するか。それはいかにも落着きが悪い（選集ならばともかく麗本はれっきとした義山の全

詩集なのだ)。そこでまずヒントになるのは例の無題詩で、巻七に「無題七首」として無題詩中の七律がまとめられているが、三巻本では集外詩に編入される「萬里風波570」が冒頭に、以下「昨夜星辰山」「來是空言114」「颯颯東南115」「相見時難150」……と続く。ところが元の至大元年(一三〇八)に刊行された『唐詩鼓吹』(義山詩三四首を載せる)に、「無題五首」としてこれと同様の順序で「萬里風波」から「相見時難」に至る五篇をならべる。しかも兩者共通して「萬里」を「萬事」に作り、これは他本に一切存在せぬ異文で、そう思って見れば、他の個所でも同じばあいが見えてくる。(1)「無題111」7句「余」を「予」に、(2)「無題114」5句「照」を「燭」に、(3)「宋玉394」1句「臺」を「門」に、2句「唯」を「獨」に、(4)「春日寄懷532」4句「又」を「更」に、兩者はそれぞれ作る。ただし鼓吹の三四首の詩篇排列は、ほぼ舊(三巻)本の編次を踏襲する結果たるものが明白なのに對し、麗本の七律二巻は、全體としては、舊本の編排に従っていない。そこで、この兩者の間柄は、朱本と全唐詩のような瓜二つの親子とまではとも行かず、せいぜいがどこかで血のつながっている可能性ありというのに止まる。そのむずかしい血縁を強いてたどるならば——元代半ば以前に十巻本の義山詩集が出現して鼓吹編纂に際して資料の一となり、本國では亡びたのが朝鮮に傳存し、のちにそれを祖本として麗本が作られた——この假説の難點は、何より第一に、中國の舊書目に十巻本など影さえ見當らぬこと、第二に五・六巻頭第二行に「五言排律」と明記されることで、詩集に五排の目が立てられるのは普通『唐音』(一三四成書)からとされ、元代にも分體十巻本が實在して鼓吹に影響したとすれば、五排標榜の詩集の出現年代を傍證なしで半世紀早めねばならなくなってしまう。要するに假説というより想像説といった方がよいのではあるが。



明代において當然論及すべき本に『唐音統籤』(一六三三ごろ成書)<sup>23</sup> 李商隱卷があるが、胡氏が最高水準の唐詩の専門家だけに、編次・字句とも編者の個人的見解に色濃く染められ、底本の推定すらむずかしく、あえて割愛せざるをえなかった。ただ、馮浩注は本文校定に際し陰に陽に統籤本をとるばあいが多く、その点だけでも注目に値する重要な板本たることを指摘するに止める。末尾にとりあげたテキストの一覽表を掲げておく。

注

(1) 「小考」において「李杜韓白では流石に宋元の刊本がいくつかあるけれど、知名度が少し落ちると古刊本ひとつでもあればいい方で、王孟韋柳をはじめ、陳子昂、岑參、高適、王昌齡、孟郊、劉禹錫、賈島、元稹、杜牧……いずれもしかり。」と記したが、これは筆の滑りも甚しく、王孟韋柳・孟郊・劉禹錫・元稹の名をここに列ねたのはまことに輕率であった。

(2) 葉葱奇『李商隱詩集疏注』(一九八五・人民文學出版社)の凡例を見れば、「北宋本」「南宋本(清・陸敕先校訂本)」を用いて正文を校したとあり、あたかも「宋本」を目暗したかのごとき書きぶりである。「宋本」二種はいずれも北京圖書館藏の、清鈔本ならびに校宋毛板をさすのであろうが、それにしても人騒がせな文章ではある。

(3) 明刊本。九行十九字。版心題義山二字。審其字體。當爲明嘉靖時刊本。前李商隱小傳數行。次目錄。本書分五言古。七言古。五言律。五言排律。七言律。五言絕句。七言絕句各爲卷。號數通各卷計之。七言律以下別爲號數。

按義山詩清朝盛行。刻本最多。然求一明刻本。自汲古閣外殆不可得。前月在蘇州葉部園同年許見嘉靖刻二卷。乃毘陵蔣孝唐人十二家集本也。雖非單刻。已爲罕見。頃來杭州。至述古齋李寶泉處得此書。爲之狂喜。

渠輩視之不甚措意。不過與普通流行之王孟高岑。飛卿長吉等相擬。故索值亦不過昂。自余觀之。則較之通行宋元本更爲難得。然則雖謂與宋元同珍可耳。

聞陳韞山言。昔年曾得此刻本。以三十金售於何秋葦中丞。書爲項子京舊藏。子京有手識一條。云得此書值四兩。明季清初人收書以兩計者惟宋本爲然。觀汲古目可知。然則三百年前視此已爲珍秘。今日余之高自矜詡寧爲過哉。

(4) 此本五言已標排律。決非宋本所出也。己未七月十二日記。沅叔。陳振孫書錄解題載李義山集八卷。樊南甲乙集四十卷。惟玉溪生集爲三卷。然云即前卷中賦及雜著。且馬端臨文獻通考亦祇稱爲二卷。此本標李義山集。專錄其詩。與振孫所載玉溪生集。卷帙雖同。其書各異。則非宋人所刊無疑。特標刻清朗。亦明槩之善本也。

(5) 此本無由得觀爲恨。

(6) 『文淵閣書目』讀畫齋叢書本は、卷九「文集」類に「李義山文集一部十册開本十二册」、卷一〇「詩詞」類に「李商隱詩一部四册開」と記す。同叢書本卷末の鮑廷博の識語に、「右の明の文淵閣書目、恭みて欽定四庫全書中に就きて録出す。家塾舊藏の本に較べて完善たり。(中略)塾本は字號に分たず、類毎に完全殘缺の三等を以て編次し、當日官本の外、別に編して以て稽攷に便とせしに似たるなり。今次第は悉く官

本に違ひ、而して全缺を以て各書の下に分注す。(中略)二十卷に分ち、官本の四卷と小異あるは、則ち(官本の)帙小にして葉繁なるを以て、聊か展開に便ならしむるのみ(右明文淵閣書目。恭就欽定四庫全書中録出。較家塾舊藏本爲完善。(中略)塾本不分字號。每類以完全殘缺三等編次。似當日官本之外。別編以便稽攷也。今次第悉遵官本。而以全缺分注於各書之下。(中略)分二十卷。與官本四卷小異。則以帙小葉繁。聊便展開耳)従つて鮑氏家塾本によれば、この義山詩集は當時すでに闕書となつていたことになる。

(7) 十冊四冊。豈較今本爲多。惜不能搜校已。

(8) 其集唐宋以來。祇有此本。近刻或分體。或編年。皆非其舊也。

(9) 此詩見杜牧集。○以下四首。一本闕。

(10) 此詩亦見杜牧外集。題作隋苑。注。一云定子牛相小青。

(11) 庫本および錢本・蔣本は「故」を「故府」に作る。

(12) 「東南、姜本・朱本作「東南」(劉學鍇・余恕誠選注『李商隱詩選』

〔一九八六・人民文學出版社〕二二九頁)姜本は明姜道生刻『唐三家集』本(北京圖書館藏。未見)をさす。

(13) 舊本皆作東。朱氏作中。誤也。

(14) 唐李商隱詩集。唐書藝文志云玉谿生詩三卷。(中略)直齋書錄解題云李義山集三卷。蓋自宋以來所傳皆如此。故毛晉汲古閣刊八唐人集。席啓寓刊百家唐詩皆因之無異同也。此明嘉靖庚戌毘陵蔣氏刻中唐人集十二家之一。其本分體。始五言古。終七言絕。爲六卷。半葉十行。行廿二字。句中間附小注一作某。皆世行本所無。以錢牧翁手校宋鈔本證之。往往與之相合。知必有所本矣。(中略)其注本有仍三卷本之舊者。有改爲編年者。惟白文分類本則未之有。有之。僅此本耳。義山詩以類祭爲工。世無李善注選之才。終不免失之穿鑿。余恆思得一白文善本。一洗塵障。除毛席二刻外。不獲一稍舊之本取便流覽。今得此本。可謂如願相償矣。書前有長洲龔氏羣玉山房藏書記朱文中方印。又有野夫所藏朱文小方印。蓋二百餘年。未出蘇境。自來蘇人如汪闓源藝芸書舍。黃

蕘翁百宋一廬。收藏舊刻書極多。獨未涉及毘陵蔣刻唐詩一種。則其本之希見可知矣。己未初夏芒種。

(15)

明嘉靖庚戌。毘陵蔣氏惟忠孝以家藏唐人詩集儲光羲以下一二家授梓。既自爲之引。又屬方山薛應旂序之。十二家者。儲光羲集五卷。劉隨州集十卷外集一卷。毘陵集三卷。錢起集十卷。盧戶部集十卷。孫集賢集一卷。崔補闕集一卷。劉賓客集六卷。張司業集六卷。賈浪仙集十卷。王建集八卷。李義山集六卷。通七十七卷。序後有臥龍橋東三徑主人牌子。又毘陵陳奎刻一行。知其書即刻於常州者也。半葉十行。行二十字。白口。左右雙闌。諸家編次皆分體。前有目錄。儲光羲集錄願況序。張司業集錄張洎序。又錄正德乙亥河中劉成德序。其它咸無序跋。按蔣氏自序。言以家藏鈔本付梓。然以諸家集攷之。其儲錢王盧劉長卿。卷數與舊本相符。崔孫二集無舊本可證。第寥寥數葉。其原編當爲一卷可知。惟毘陵集本爲二十卷。今祇錄其詩三卷。證以席刻正同。或亦出於舊編。若劉賓客集之作六卷。張籍集之作五卷。李義山集之作六卷。則徧檢古今書目。毫無所據依。疑蔣氏以意爲之編次。殊失矜慎之道矣。然明人勇於傳刻。而標題編次。往往輕變古式。殆已習爲風氣。不知其非。於蔣氏又何責焉。

余於十五年前。薄游南中。收得此集。祇存八家。市估至剋改序文。別寫總目。以充全帙。然余固心知其非。今各冊有太原氏珍藏印者皆是也。嗣游廠肆。獲錢盧劉賓客三家。可以補其闕遺。而義山一集。則訪求積年。終不可獲。功虧一篑。深用悵悵。泊歲在乙丑。作客吳閫。晤葉奕彬同年。談及其家適有此集。慨允以他書相易。因載取以歸。其卷首有長沙龔氏羣玉山房藏書記。野夫所藏二印。卷末有奕彬手跋四百餘言。謂白文分類本。此爲創見。且吳中藏家如藝芸士禮。多儲舊槧。而毘陵蔚刻。獨無一種。其罕觀可知。其言矜詡甚至。然終能割愛相畀。奕鍊石補天之功。竟掘井及泉之力。良足感也。茲詳述其原委。以志良友之高誼焉。(中略)此書自嘉靖刻梓。迄於今日。已越三百八十餘年。傳本之稀。固已如鳳毛麟角。況復自余手中。由闕而獲完。既失而復得。



涉歷十數星霜。始得宣綾包角。繭紙爲衣。煥然改觀。以陳諸几案。則後人摩挲賞玩之餘。宜如何什襲珍儲。世守勿失。毋負余艱動搜討之意乎。甲戌重九日。沅叔書於藏園食字齋中。

(16) 北京圖書館・七八卷本。復旦大學圖書館・殘缺本。臺北中央圖書館・八一卷本(二部)。國內では尊經閣文庫・八一卷本。以上のように板によって卷數に小異がある。

(17) 臺北中央圖書館藏。これと別に雍正年間進呈「正本」(墨格鈔本)が北京・故宮圖書館に藏せられるという。周助初「絃」『全唐詩』成書經過(文史八輯)参照。

(18) 劉兆祐「寫在「全唐詩稿本」影印本前面」(稿本第一冊)

(19) 天理本については藤本幸夫氏の指教による。

(20) (元祐七年十二月)十九日。秘書省奏高麗國近日進獻書冊。訪聞多是

異本。館閣所無。乞暫賜頒。降付本省。立限贍本。乞即時進納元本。別裝寫秘閣黃本書收藏。詔降付秘書省。仍令本省贍寫校正二本。送中書省尙書省。及別贍寫校正二本。送太清樓天章閣收藏。

(21) 劉玄子從朝鮮還。言彼中書籍。多中國所無者。且刻本精良。無一字不做趙文敏。惜爲倭奴殘毀。團溷之閒。往往以書幅拭穢。亦典籍一大厄會也。因目不忍見。每命部卒。聚而焚之。余乃知國初朝鮮顏子。朝議以僞書却之。此四庫之所以不及前代也。

(22) ちなみに王重民孫望董養年輯錄『全唐詩外編』(一九八二・中華書局)もこの詩を收めない。

(23) 胡夏客『李杜詩通』識語「至乙丑歲(天啓五年(一六二五))。始克發凡定例。撰統籤一千卷。閱十年書成」。